

令和5年度 静岡県立大学短期大学部
学校推薦型選抜・社会人特別選抜 試験問題

下の文章を読み、次の問に答えなさい。

問1 文中の空欄①に入る語句の組み合わせとして適切なものを選び、記号(A～D)で答えなさい。

- A. 「僕自身もそうだ」とか「僕の友人の〇〇君もそうだ」
- B. 「僕自身はそうだ」けど「僕の友人の〇〇君はそうでもない」
- C. 「僕自身はちがう」けど「僕の友人の〇〇君はそうだ」
- D. 「僕自身はちがう」とか「僕の友人の〇〇君はそうでもない」

問2 「常識」やステレオタイプにとらわれない思考法の必要性について、あなた自身の考えを600字以上700字以内で述べなさい。

<記述上の留意点>

- ① 解答は横書きとすること。
- ② 句読点および改行による空白も文字数に含めること。
- ③ 問1の解答は1行目に、問2の解答は3行目から記述すること。

私が教えている東大生の中には、いわゆる中高一貫校の出身者が少なくありません。中学校受験を経て、有名な中高一貫校に入ってから東大に来る。その意味で、長い間自分たちと同じような均質的な集団で育ってきた学生たちが多いのです。このような学生たちは、世間的にいえばたしかに「頭のよい」学生たちなのかもしれません。しかし、学生によっては、なかなか「堅い発想」をもっている場合があります。

例えば、学生たちと教育の問題を議論しているときです。ある学生がつぎのような発言をしました。「エリート校の出身者は、幼いときから過酷な受験競争を勝ち抜いてくる。そして、競争の過程で、他人を蹴落としてくる。したがって、友だちをつくるのがうまくない」

この主張には、受験教育は競争を促すという「常識」と、受験競争は他人を蹴落とすことになるので、友人関係がうまくいけなくなるという「常識」とが含まれています。なるほど、世間に流布している受験教育のイメージにしたがえば、このような発想が出てくるのもうなずけます。ほかの学生たちも、この意見に対し、「うん、そうだ」といわんばかりに首をタテに振りながら聞いていました。

しかし、このようなとらえ方は、有名進学校のステレオタイプをもとにしています。進学校をめざして勉強に励む有名進学塾の若い生徒たち。「必勝」のはちまきをして、テストで一点でも多くをめざ

塾の子どもの姿が、テレビや雑誌に登場することがあります。そうした子どもたちのイメージは、幼い頃から競争、競争に明け暮れていれば、自然と友だちもできなくなってしまうだろうという「常識」をつくり出します。受験教育が批判される場合に、きまって出てくる常套句——「受験を勝ち抜いてきたものは、頭はいいかもしれないが、人間的には冷たい」とか、「受験競争は友人関係を打ち壊す」といった「常識」が、こうした学生たちの意見に反映しているのです。

このような意見は、ほぼ毎年のように繰り返されるものです。ということは、東大生の間では、ある程度共有されている「受験観」といってよいでしょう。しかし、こうしたステレオタイプにとらわれているかぎり、有名進学校の本当の姿は見えてきません。

そこで私は、こういった意見をいう学生に、「それじゃあ、君の周りにいる有名進学校出身の学生はどうだい？」と聞いたりします。場合によっては、意見をいった学生自身が、そういう進学校の出身者であることもありますから、そういうときには、「じゃあ、君自身はどうですか？」と質問します。すると、たいていは、①といった意見が出てきたりします。つまり、自分自身や自分の身近な人のことは棚上げして、それでもやはり世間に広まっている「常識」につかまっていたのです。

実際には、こうした進学校の出身者には、人との関係のもちかたが巧みな学生が少なくありません。小さいときから受験できゅうきゅうとしていたというより、かなり余裕をもって大学に入ってくる学生が少なくないのです。こうした学生の場合、大学に入るまでに、地方の公立校出身者よりも、かえって幅広い経験をもっている場合さえあります。受験競争を通じた経験よりも、生まれ育った家庭や地域の環境の影響が強いからでしょうか。世間で思われているよりも「余裕」を感じさせる、経済的にも文化的にも豊かな家庭の出身者の人間関係の巧みさが、ステレオタイプにとらわれている限り見えなくなってしまうのです。

見えなくなるのは、有名進学校出身の学生たちの姿だけではありません。そもそも、「受験を勝ち抜いてきたものは、人間的には冷たい」といったイメージが、どうしてこれほど広まっているのか。そうした「常識」が広まることで、何が隠されているのか。競争の勝者を否定的に見なすことで、私たちの社会は、何を得ているのか。

これらの問題は、有名進学校の出身者の実像と虚像の違いから、日本社会が人材を選抜していく際の特徴を検討する上で、重要な視点を提供してくれます。「エリート」たちのイメージを醜く描き出すことが、「だれでも同じ」という日本社会の横並びの意識を強めているのかもしれない。あるいは、競争の勝者たち自身にとっても、「後ろめたさ」を植えつけることで、ほかの社会であれば表面に表れやすいエリートと大衆との葛藤や摩擦をやわらげているのかもしれない。もっと別の見方をすれば、競争に敗れた人たちに、「勝ったものたちは、人間的にすぐれているわけではない」という「酸っぱいブドウ」の気分を味わわせる。こうして勝者たちを見下す見方を広めておくことが、エリートに対する大衆の不満をガス抜きすることになり、結果的には、エリート自身の存在を安泰にしている。そういった皮肉な見方もできるでしょう。ステレオタイプの見方からちょっと離れるだけで、こうしたさまざまな問題が見えてきます。ステレオタイプをずらしてみることで、「受験の勝者は人間的に冷たい」といったイメージにとらわれているかぎり見えてこない問題をとらえる視点が得られるのです。